

重兵衛さんの一家

寺田寅彦

青空文庫

明治十四年自分が四歳の冬、父が名古屋鎮台から熊本鎮台へ転任したときに、母と祖母と次姉と自分と四人で郷里へ帰って小津^{おづ}の家に落ちつき、父だけが単身で熊本へ赴任して行つた。そうして明治十八年に東京の士官学校附に栄転するまでただの一度も帰省しなかつたらしい。交通の便利な今のわれわれにはちよつと想像し難いほどの長い留守を明けたものであるが、若い時から半分以上は他国を奔走してばかりいた父には五年くらいの留守は何でもないことであり、留守を守る祖母や母も当り前の事と思つていたものらしい。当時の土佐と熊本とでは、心理的には今の日本とカリフォルニアくらいへのあたりがあつたのである。郷里へ引上

げると間もなく次姉は市から一里くらい西のA村に嫁入りをしたので、あとは全く静かな淋しい家庭であった。その以前から長姉の片付いていたB家が三軒置いた隣りにあつて、そこには自分より一つ年上の甥が居たから、自分の幼時の多くの記憶はこの姉の家と自宅との間の往復につながっている。それと、もう一つ、宅うちの門脇の長屋に住んでいた重兵衛さんの一家との交渉が自分の仮想的自叙伝中におけるかなり重要な位置を占めているようである。

重兵衛さんの家は維新前にはちゃんとした店をもった商人であつたらしいが、自分の近づきになった頃はいわゆる「仲持なかもち」すなわち、今の土地家屋売買周旋業と云つたような商売で、口と足とさえ働かしておれば自然に懷中に金の這入つて来る種類の職業

であつたらしい。五十近いでつぷり肥つた赤ら顔でいつも脂ぎつあぶらて光つていたが、今考えてみるとなかなか頭の善さそうな眼付きをしていた。夏の暑い盛りだと下帯一つの丸裸で晩酌の膳の前にあぐらをかいて、しぶうちわ 渋団扇で蚊を追いなながら実にうまそうに杯をさかずきなめては子供等を相手にして色々な話をするのが楽しみであつたらしい。かつお 松魚の刺身のつまに生のにんじくをかりかり齧かじつているのを見て驚歎した自分は、自宅や親類の人達がどうしてにんじくを喰わないかと思つて母に聞いたら、あれを食うと便所が臭くなるからいけないと云うことであつた。重兵衛さんの家では差支えのない事が自分達の家ではいけないのは、どういう訳だかと思議に思われた。そう云う種類の事がいろいろあつた。その中の

一つがこのにんにくの問題であつたのである。そのせいでもあるか、重兵衛さんが真白な歯の間へ真白なにんにくの一片をくわえて、かりかりと噛み切る光景が鮮明なクローズアップとなつて想い出される。幼時の記憶には実に些末なような事柄が非常に強く印象に残っていることがある。そういうことは意識的にはつまらぬことのようにも、意識の水準以下で、どんな思いも寄らない重大な意義をもち、どんな重大な影響を生涯に及ぼしているかもしれない、しかしそれを分析して明確な解説を与えることは容易ではないのである。自分のこの大^{にんにく}蒜の場合について考えてみると、あるいはこの些細な副食物が、一方では自分等の家庭と、他方では重兵衛さんで代表された一つの階級の家庭との間のあらゆる物

質的また精神的な差別の象徴として印象されたものではなかつたかとも思われるのである。

重兵衛さんの晩酌の膳を取巻いて、その巧妙なお伽とぎばなし 噺を傾聴する聴衆の中には時々幼い自分も交じていた。重兵衛さんの長男は自分等よりはだいぶ年長で、いつもよく勉強をしていたのでその仲間にははいらなかつたが、次男の亀さんとその妹の丑尾うしおさんとが定じょうれん 連のお客であつた。重兵衛さんの細さいくん 君は喘ぜんそく 息やみでいつも顔色の悪い、小さな弱々しいおばさんであつたが、これはいつも傍で酌をしたり蚊を追つたりしながら、この人にはおそらく可笑おか しくも何ともない話を子供と一緒に聴きながら一緒に笑っているのであつた。表の河沿いの道路に面した格子窓には

風鈴ふうりんが吊されて夜風に涼しい音を立てていたように思う。この平凡な団欒だんらんの光景が焼付いたように自分の頭に沁み込んでいるのはどういう訳かと考えてみる。父の長い留守の間に祖母と母と三人きりで割合に広い屋敷の中でのつましい生活は子供心にもかなり淋しいものであったに相違ないので、この広くて淋しい家と、重兵衛さんの狭くて賑やかな家との対照が幼い頭に何かしらの深い印象を刻んだのではないかと想像される。その頃のわが家を想い出してみると、暗いランプに照らされた煤すすけた台所で寒竹かんちくの皮を剥むいている寒そうな母の姿や、茶の間で糸車を廻わしている白髪はくの祖母の袖無羽織の姿が浮び、そうして井戸端から高らかに響いて来る身に沁むような蟋蟀こおろぎの声を聞く想いがするのであ

る。寢床で母からよく聞かされた阿波あわの鳴門なるとの十郎兵衛の娘の哀話も忘れ難いものの一つであった。

重兵衛さんのお伽噺のレペルトワルはそう沢山にはなかつたよ
うである。北山の法ほうき経堂ようどうに現れる怪火けちびの話とか、荒倉山あらくらやまの
狸が三つ目入道に化けたのを武士が退治した話とか、「しばてん」

(木の葉天狗)と相撲を取る話。「えんこう」(河童かっぱ)を釣る話

とかいう種類のもが多かつた。一例として「えんこう」の話を
とると、夕涼みに江えノ口くちがわ川の橋の欄干に腰をかけているとこの
怪物が水中から手を延ばして肛門を抜きに来る。そこで腰に鉄鍋
を当てて待構えていて、腰に触る怪物の手首をつかまえてぎゆう
ぎゆう捻ねじ上げたが、いくら捻ねじつても捻ねじつても際限なく捻ねじ

られるのであった。その時刻にそこから十町も下流の河口を船で通りかかった人が、何かしら水面でぼちやぼちや音がしていると、思つてよく見ると、一匹の「えんこう」が、しきりにぐるぐる廻転運動をしているのであった。つまり「えんこう」の手は自由自在に伸長されるもので、こんなにも長くなり得るものだといふ事が、この「事実」で証明されるといふのであった。

いろいろな奇抜な方法で雀からすや鴉からすを捕る話も面白かった。一例を挙げると、庭へ一面に柿の葉を並べておいて、その上に焼しょうちゆう酎ちゆうに浸した米粒をのせておく。雀が来てそれを食うと間もなく酔を發して好い氣持になり、やがてその柿の葉を有合わせの蒲団にしてぐつつり寝込んでしまう。秋の日がかんかん照りつけるので柿の

葉が乾燥してじりじりと巻き上がるのでいつの間にかそっくりと雀を包んで動けないように縛つてしまふ。その頃を見計らつて箒ほうきで掃き集めると米俵に一俵くらいは容易に捕れるというのである。また、鴉を捕る法としてはこんながある。牛の脊中へ赤い紙片を貼付け、尻尾しつぽに摺粉木すりこぎを一本縛り付けて野良のらへ出しておく。鴉が下りて来て牛の脊中の赤い紙を牛肉と思つてつつかと、牛は蠅でも追う気でぴしやりと尻尾ではたく、すると摺粉木の一撃で鴉が脆もろくも撲殺されるといふのである。

これらの話は、柳家やなぎやこ小さんの落語のごとく、クライスラーのクロイツェルソナタのごとく実に何度となく同じ聴衆の前に繰返されて、そうしてその度ごとに新しくその聴衆を喜ばしたもので

ある。繰返せば繰返すにつれてますますその面白味の深さを加えたものである。この点では論語や聖書も同じことであるのみならず、こういう郷土的色彩の濃厚な怪談やおどけ話の奥の方にはわれらとは切っても切れない祖先の生活や思想で彩られた背景がはつきりと眺められるのであるから、こういう話を繰返し聞かされている間にわれわれの五体の幾億万の細胞の中に潜んでいる祖先の魂が一つ一つ次第次第に呼び覚されて来るのであった。中学時代になってからやっとイソップやグリムやアンデルセンにめぐり合つて日本の外に他の世界があること、そこにはわれらとはよほどちがった生活と思想のあることを教えられたのであった。今の子供はコスモポリタンなお伽噺の洪水の波に押流されているよう

なものである。もしも今の少青年に民族的な精神が欠乏してゐるとすればその原因の一つとしては西洋お伽噺の食傷も数えられなければならぬかもしれない。

重兵衛さんは性的な問題を取扱つた話はほとんどしなかつたやうである。姉の家で普請をしていた時に、田舎から呼寄せられて離屋はなれに宿泊していた大工のもく空さんから色々な話を聞かされたがこれにはずいぶん露骨な性的描写がいりま入交じつていたが、重兵衛さんの場合には、聴衆の大部分が自分の子供であつたためにそういう材料はことさらに用心して避けたものと思われる。

とにかく重兵衛さんの晩酌さかなの肴さかなに聞かしてくれたい色々な怪談や笑話の中には、学校教育の中には全く含まれていない要素を含ん

でいた。そうしてこの要素を自分の柔らかい頭に植えつけてくれた重兵衛さんに、やはり相当の感謝を捧げなければならぬように思う。重兵衛さんは自分の心にファンタジーの翼を授け、自分の現実世界の可能性の牢獄を爆破してくれた人であった。

重兵衛さんの次男で自分よりは一つ二つ年上の亀さんから実色々のことを教わった。彼はたしかに一種の天才であったらしい。何をさせても器用であつて、彼の作つた紙鳶たこは風の弱い時でも実によく揚りそうして強風にも安定であつた。一緒に公園の茂みの中にわなをかけに行つても彼のかけた係蹄わなにはきつとつぐみや鶉ひわ鳥が引掛かるが、自分のにはちつともかからなかつた。鰻うなぎ釣りや小海老こえび釣りでも同様であつた。亀さんは鳥や魚の世界の

秘密をすっかり心得ているように見えた。学校ではわりに成績のよかった自分が、学校ではいつもびりに近かった亀さんを尊敬しない訳には行かなかつた。学校で習うことは、誰でも習いさえすれば覚えることであり、一とわたりは言葉で云い現わすことの出来るような理窟の筋道の通つたことばかりであつたが、亀さんの鳥や魚の世界に関する知識は全く直観的なものであつて、とうてい教わることの出来ない種類のものではあつた。亀さんは眼をつむつていてもその心の眼には森の奥における鳥の行動や水底の魚の往来が手に取るように見えすくかと思われるのであつた。そういう種類の、学校では教わることの出来ない知識が存在するということ、そういう知識が貴重なものだということを、この亀さんに

教わったのである。

母や祖母は自分が亀さんと遊ぶことをあまり喜ばなかつたらしい。亀さんは実際「行儀の悪い」子供であつたらうし、また随分いたずらものでもあつたらしい。草原の草を縛り合わせて通りかかつた人を躓つまずかせたり、田圃道に小さなおとしあな陥おとしあなを穿あなつて人を踏ふみこませたり、夏の闇の夜に路上の牛糞ぎゆうふんの上に螢を載せておいたり、道端に芋の葉をかぶせた燈火あかりを置いて臆病者を怖がらせたりと云つたような芸術にも長じていた。月夜に往来へ財布を落しておいて小蔭にかくれて見ている、通行人があたりを見廻わしてそれを拾おうとするときに、そつと手許の糸を手繰たぐると財布がひとりですると動き出すというような深刻な教育法をも実行し

た事があつたようである。こういう巧智はしかしことごとくが亀さんの独創によるものではなくて、大部分は重兵衛さんの晩酌時の講話の時に授かつたものであつた。重兵衛さんの寺子屋時代の悪戯いたずらにはずいぶん過劇なものもあつたようである。

こういう、学校では教わらない悪戯教育も、今から考えてみると自分には色々な意味で有益であり貴重なものであつたように思われる。人生行路に横たわる幾多の陥穽に対する警戒の芽生えを植付けてくれたような気がする。他人の軽微な苦痛を己おのが享樂の小杯に盛ろうとする不思議な心理がいかなる善良な人々の心の奥にも潜在することを教えてくれたようである。それから、冒険というものに対する本能的な興味の最初の小さな焰に点火してくれ

たとも考えられる。

この頃活動写真で色々な空中戦の壮烈な光景を見せられる。空の勇士、選^えりぬきのエースが手馴れの爆撃機を駆って敵地に向かうときの心持には、どこかしら、亀さんが八^やかましやの隠^{いんきよ}居の秘蔵の柿を掠奪に出かけたときの心持の中のある部分に似たものがありはしないか。こんな他愛のないことを考えることもある。それはとにかく、亀さんが鳥人になったらおそらく人並以上の離^{はな}れ業^{わざ}を演じ得る名操縦士になったことであろう。

亀さんの妹の丑尾さんとはあまり一緒に遊ぶことがなかったよ
うである。その頃は男の子と女の子が遊んでいると、他の遊び仲間から「おとことおなごとおにやんべ、やんがておややができや

んしよ」と云つて囃^{はや}し立てられるのであつた。しかしただ一度ある小春日のわが家の門前で起つた些細な出来事だけがはつきり印象に残っている。多分七、八歳くらいの自分と五、六歳くらいの丑尾さんとが門前のたたきの斜面で日向^{ひなた}ぼっこをしていた。自分が門柱にもたれてぼんやり前の小川を眺めていたとき丑尾さんが自分の正面に立ってしばらく自分の顔を見詰めていたようであつたが、真に突然に、その可愛い両腕を左右にぱつと拵げたと思つといきなり飛びつくようにして、しっかりと自分を抱擁した、そのとき自分がそのままにじつとしていたのか、それとも急いで押しのかけたか、それはちつとも記憶していない。ただ覚えているのは、丑尾さんが着古した袖^{そでなし}無のちやんちやんを着て、頭を小ち^{ちっ}

やなおちごに結^ゆっていたことと、それから、その日の小春の日影が実にうららかに暖かくのどかであったということだけである。

この丑尾さんは、たしか自分の家がその後一時東京に移っていたその二年の間に病死してしまったので、十歳にも満たない本当に果敢^{はか}ない存在ではあった。しかし自分の幼年時代の追憶の夢の舞台上に登場する唯一の異性のヒロインはこのやや不器量で可哀そうな丑尾さんであったのである。

重兵衛さんの長男楠次郎さんから自分は英語の手ほどきを教わった。これについては前に書いたことがあるから略する。楠さんは独学で法律を勉強して、後に裁判所の書記に採用された。弟妹とちがって風采もよくてハイカラでまたそれだけにおしやれでも

あつた。自宅では勉強が出来ないので円えんぎ行寺橋ようじばしの袂たもとにあつた老人夫婦の家の静かな座敷を借りて下宿していた。夏のある日の午後、いつものようにそこへ英語を教わりに行つた時に、自分には初めての珍しい飲料を飲まされた。コップに一杯の砂糖水をつくつて、その上に小さな罫に入つた茶褐色の薬液の一滴を垂らすと、それがぱつと拡がって水は乳色に変わった。飲んでみると名状の出来ぬ芳烈な香気が鼻と咽喉のどを通じて全身みなぎに漲るのであつた。何というものかと聞くと、レモン油ゆというものだと言えられた。今のレモン・エッセンスであつたのである。明治十七、八年頃の片田舎の裁判所の書記生にしては実に驚くべきハイカラであつたに相違ないのである。ゲーテのライネケフツクスの訳本を読んで

聞かせてくれたり、十歳未満の自分にミルの経済論、ルソーの民約論を教授してくれるという予告だけでもしてくれた楠さんは、たしかにその時代の新人であり、少なくとも自分にとっては、来べき「約束の国」の先触れをする天使の役をつとめてくれたように思われる。

自分の一家がいったん東京へ移ってから再び郷里に帰った頃は重兵衛さんの家は宅うちのすぐ東隣の邸に移っていた。まもなく重兵衛さんは亡くなってそのうちに息子の楠さんは細君を迎えて新家庭をつくった。新婚後まもないことであつたと思う。ある日宅の女中が近所の小母おぼさん達二、三人と垣根から隣を透見すきみしながら、何かひそひそ話しては忍び笑いに笑いこけているので、自分も好

奇心に駆られてちよつと覗いてみると、隣の裏庭には椅子を持出してそれに楠さんが腰をかけている。その傍に立った丸鬚まるまげの新婦が甲斐かい甲斐がいしく襷たすき掛けをして新郎のために鬚ひげを剃つてやっている光景がちらと眼前に展開した。透見の女性達の眼には、その光景が、何かひどく悪い事でもしている現場を見届けでもしたように、とにかく笑うべく賤しむべきこととして取扱われているらしかつた。しかし当時の自分にはその光景がひどく美しく長閑のどかなものに思われ、そうして女中等のそういう態度に対して少なからず不満を懐いだいたようであつた。

その後重兵衛さんの一家がどうなつたか。これに関する自分の記憶は実に綺麗ぬくに拭ぬわれたように消えてしまつている。ただ、楠

さんの細君が亡くなり、次にひどく酒飲みになった楠さんも若死をしたこと、亀さんが医師の家に書生をしていて、後に東京へ出て来てどこかの医者の代診をしているという噂を聞いたように思うだけである。

幼時を追想する時には必ず想い出す重兵衛さんの一族の人々が、自分の内部生活に及ぼした影響と云ったようなことは、近頃までついで一度も考えてみたことはなかったのである。この頃になって、自分に親しかった、そうして自分の生涯に決定的な影響を及ぼしたと考えらるるような旧師や旧友がだんだんに亡くなって行く、その追憶の余勢は自然に昔へ昔へと遡って幼時の環境の中からなじみ馴染の顔を物色するようになる。そういう想い出の国の人々は、

別にえらい人でもなんでもなかったであろうが、そういう人々から全く無意識の間に受けた教育の効果は、よかれ悪しかれ実に予想外に重大なものであるということが、やっこの頃になって少しばかり分りかけて来たような気がするのである。

このなんらの山もない重兵衛さん一家の平凡な追憶記は、子供をもった現代の世間の親達にも、もしや何かの参考になるかもしれないと思うのである。
(昭和八年一月『婦人公論』)

(『蒸発皿』への追記) この記事が縁となって、重兵衛さんの次男の亀さんからの消息に接することが出来た。今日では立派な医師となって大連^{だいらん}の方に住んでいるのである。家族一同の

写真を送ってくれたが、四十年前の亀さんの面影が今日でもそっくりそのままに残っているのであった。

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

1985（昭和60）年11月5日第3刷発行

初出：「婦人公論 第十八年第一号」

1933（昭和8）年1月1日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

重兵衛さんの一家

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>